

の吸収機能と関連しているものと考えられることから、今後も口腔諸臓器、さらには全身のリンパ管構築を検索する予定である。

本法で最も時間のかかる行程は連続薄切切片作成である。先進歯科医療研究センターに導入した顕微鏡画像合成立体構築システムではこの行程の時間削減を可能としている。すなわち、準薄切もしくは厚切り切片での検索が可能となった。本法はリンパ管構築のみならず、種々の臓器、疾病の三次元構築による検索に活用できるため、管腔構造のみならず、他分野での利用も可能である。

演題3. 生理的口臭とエゴグラムの関連

○森谷 俊樹, 岸 光男, 相澤 文恵,
阿部 晶子, 米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

口臭には対人関係の不和、心理的ストレス、各種の悩みが影響するといわれている。そのような心の状態を測定するものとして心理テストがあり、代表的な検査としてエゴグラムがあげられる。そこで本研究では、全身および口腔内の健康な人を対象にして、口臭強度とエゴグラム、ならびに口臭関連要因とエゴグラムの関連について分析した。

対象は盛岡市内某専修学校の女子生徒26名で、平均年齢(±標準偏差)は20.0歳(±1.8歳)である。方法は舌苔の付着範囲の検査、口臭強度の検査、質問紙法エゴグラム、ならびに口臭に関するアンケートを実施した。舌苔の付着範囲は、舌背上の舌苔付着領域により4段階に分類した。口臭強度はハリメーターにより正午前4日間測定し、4日間の平均値を個人のハリメーター値とした。質問紙法エゴグラムにはEgo-gram Check List (ECL)を使用した。26名の対象者のうち1名を記入ミスにより、2名を虚言の疑いにより除外したため、23名の検査結果を有効とした。アンケートは日常生活に関することおよび口腔内自覚症状に関することについて行った。

その結果は以下のとおりである。

1. 舌苔の付着範囲とFC (Free Child) の間にやや強い負の相関があった。
2. 舌苔が舌背表面1/3以上に付着している対象者は、1/3未満に付着している対象者に比較してFCが低かった。
3. 舌苔が舌背表面1/3以上に付着している対象者

は、1/3未満に付着している対象者に比較して口臭強度が強かった。

4. 口渇の自覚がある対象者にはFCがAC (Adapted Child) より低い傾向があった。

これらのことから、口臭強度が非常に強い者は、弱い者に比較してFCが低い傾向を認めた。口腔乾燥状態と性格テストの関係は、主観的なアンケート結果の他に客観的な唾液流出量についても分析をする必要がある。

演題4. 3歳児の母親の歯科保健意識と行動を規定する要因の分析

○相沢 文恵, 阿部 晶子, 岸 光男,
米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

1998年4月に3歳児健康診査を受診した286名の幼児の母親を対象として歯科保健に関する意識調査を実施した。調査に用いた質問項目に対する回答は、1:非常にそう思う, 2:そう思う, 3:どちらともいえない, 4:そう思わない, 5:全くそう思わない, の五段階評価とした。はじめに、質問項目間の関連性をSpearmanの順位相関係数を用いて分析した。その結果、う蝕は重大な病気だという「重大性」の認識、う蝕がないことは良いことだという「カリエスフリーの価値」の認識、予防行動をとることは価値ある行為だという「予防行動の価値」の認識、子供の歯の健康を守るのは親の役割だという「役割」の認識が高い人ほど子供の口腔内の状況に対する「関心」が高い傾向にあることが認められた。また、保健行動の実践の動機として大きな力を有する「関心」を高めている上述の諸認識が、養育環境によって異なるか否かをMann-WhitneyのU検定を用いて分析した結果、夫婦で子育てについての話をよくする家庭の母親、父親が子供とよく遊んでいる家庭の母親が、親としての役割意識が強く、予防行動の価値を高く認識する傾向にあった。また、歯科保健に関する知識を主に歯科医師や歯科診療所から得ている母親はマスコミや知人などから情報を得ている母親より乳歯う蝕の重大性や予防目的での歯科受診の価値を強く感じている傾向にあった。以上の結果から、保健行動の実践の動機となる関心に関わるのは価値観や役割意識であり、それを高めるのは育児環境における知識や父親の援助というソーシャルサポートであることが認められた。関心の高まりに

よって保健行動はモチベートされるが、今後それを習慣化していくためには価値観や役割意識と同様にソーシャルサポートが重要であり、子が幼児期にある時には育児を担う母親に対して、子が自らの手で健康を保持増進する段階に至った時には子自身に対して、継続的に行われる必要があると考えられた。

演題5. 乳歯列不正咬合の経年的な発現頻度に関する実態調査

○小丸 恵, 阿部 英一, 野坂久美子

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

近年小児を取り巻く環境が変化し、当科に来院する患児の口腔内も従来と異なった変化があるように思われる。その一つに不正咬合を主訴に来院する患児が非常に多くなってきた。その原因が歯列不正に対する保護者の関心度が高くなっているためか、あるいは、歯列不正を有する小児が増えたためか定かではない。そこで今回我々は、乳歯列を対象として、各歯列不正の経年的な変化について調査した。対象は、昭和60年から平成11年に当科を受診した患児24388人中、3歳から5歳までの男女4925人で資料は石膏模型と参考に病態写真を用いた。調査の集計は、昭和60年から平成元年、平成2年から6年、平成7年から11年と各年代を5年間隔で3群に区分し、経年的推移を比較検討した。不正咬合は小児歯科学会、西條ら、八尋らの方法を参考にして上顎前突、過蓋咬合、開咬、1, 2歯の反対咬合、3歯以上の反対咬合、交叉咬合、叢生に分類した。なお、齶蝕により歯冠崩壊が著しい歯列や口蓋裂の患児は全て除いた。結果として、不正咬合は、経年的に増加傾向にあった。不正咬合の中で、最も経年的な変化を示したのは開咬であり、有意な増加が認められた。次いで上顎前突が増加傾向にあったが、1, 2歯の反対咬合は、逆に減少傾向にあった。叢生、過蓋咬合、3歯以上の反対咬合、交叉咬合については経年的な変化は見られなかった。一方、叢生と他の不正咬合との関係では、上顎前突が叢生を伴う場合、上下顎両方に叢生を認めるものに増加傾向があり、過蓋咬合で叢生を伴うものでは、下顎のみに認められる叢生が経年的に減少傾向にあった。また、3歯以上の反対咬合と叢生では、上顎のみの叢生が増加傾向にあり、逆に、上下顎両方の叢生は減少していた。交叉咬合と叢生の関係では、交叉咬合の3群で半数が叢生を伴っていた。一方、全体的に叢生を伴う不正咬合の出現が

高くなってきている。以上の結果から、最近増加傾向にある開咬ならびに上顎前突と叢生との関係について今後、その要因を検討する必要がある。

演題6. 顎顔面形態別にみた咽頭扁桃肥大と鼻腔通気度との関連

○神 智昭, 古町 美佳, 佐藤 和朗,
清野 幸男, 三浦 廣行

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

【目的】咽頭扁桃肥大などによる鼻呼吸機能障害のため、正常な鼻呼吸が行えず、口呼吸が習慣化してくると、顎顔面の成長、口腔周囲筋群の発達と調和に影響を与え、種々の不正咬合を誘発する危険がある。咽頭扁桃肥大の顎顔面形態への影響は、混合歯列期以降についての検討が多くなされてきたが、咽頭扁桃肥大症は3歳から6歳にかけて最も多いと報告されていることから、乳歯列期からの影響も考えられる。そこで、本研究では、顎顔面形態と咽頭扁桃肥大および鼻呼吸機能との関連を調べる目的で、顎顔面形態を骨格型Ⅰ級と骨格型Ⅱ級に分類し、咬合発育段階別に側面頭頭X線規格写真と鼻腔抵抗値を用いて検討した。

【資料】岩手医科大学歯学部附属病院矯正歯科を受診し、矯正治療開始前の診査において鼻疾患の有無に関わらず鼻閉に関する自覚症状を持たないと判断され、鼻腔通気度測定を受けた患者を対象とした。これらのうち、骨格型Ⅰ級および骨格型Ⅱ級と判定された者から、それぞれについてHellmanの咬合発育段階でⅡC, ⅢA, ⅢB, ⅢC, ⅣAの各段階20名ずつ計100名を抽出し、合計200名より得た側面頭頭X線規格写真と鼻腔抵抗値を資料として用いた。

【方法】側面頭頭X線規格写真から角度および距離を計測し、咽頭鼻部では面積比率および距離計測を行った。また、鼻腔通気度計でポステリオール法から鼻腔抵抗値を測定した。

【結果と考察】咬合発育段階が進むに従い、咽頭鼻部における咽頭扁桃の大きさは、骨格型Ⅰ級、骨格型Ⅱ級とも増加していたが、骨格型Ⅱ級が大きいことが認められた。咽頭鼻部での気道の大きさは、骨格型Ⅰ級、骨格型Ⅱ級とも増加していたが、骨格型Ⅱ級が小さく、気道が狭窄する傾向がみられた。鼻腔抵抗値は、骨格型Ⅱ級が大きいのが、加齢に伴い骨格型Ⅰ級、骨格型Ⅱ級とも減少しており、特に混合歯列期で顕著であった。これらのことより、鼻腔の通気性が顎顔面形